

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14077

研究課題名(和文)大学生にとって意味のある学習成果可視化とは何か：学生の自己評価に注目した質的研究

研究課題名(英文)Effective Learning Outcome Visualization for University Students: A Qualitative Study Focusing on Student Self-Evaluation

研究代表者

石井 和也 (Ishii, Kazuya)

宇都宮大学・大学教育推進機構・准教授

研究者番号：70822683

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「学生自身による自己評価をどのように行われているか」及び「学生自身の学習改善と学習状況に関する説明はどのように行われているか」という学術的問いを立て研究を進めた。これらの問いに対して、学生自身が自己評価のためのツール(ルーブリック)を作成する過程に関与し、ルーブリックの意味を十分に理解した上で自己評価を行うことで、学生は自らの力について十分に説明できるようになるということが言える。このことで、学生は自らの学習を改善させることも可能となると考えられる。また、正課外活動においても、学生自身が作成に関与したルーブリックの活用が、学生の自己評価や目標設定などに役立つことが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

【研究成果の学術的意義】本研究は、ルーブリックの作成過程に学生が関与することで、ルーブリックを用いた自己評価を効果的に行うことができるということを明らかにした。また、このことにより、学生の学習改善も的確に行うことができるようになることが示唆された。これまで、教員が作成したルーブリックの効果が研究されてきたが、ルーブリック作成に学生を関与させるという視点でルーブリック活用の効果を確かめることができたという意味で、学術的意義がある。

【社会的意義】教育においてルーブリックを用いてる教員に対し、学生と協働してルーブリックを作成するという新たな選択肢を示すことができたという意味で、社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted with the research questions "How should college students perform self-assessment?" and "How do university students explain self-assessment and improve their learning?" To answer these questions, we can say that when students themselves are involved in the process of creating a tool for self-assessment (rubric), and when they conduct self-assessment with a full understanding of the meaning of the rubric, they can fully explain their abilities. This will also enable students to improve their learning. In addition, it was confirmed that the use of a rubric that students themselves were involved in creating was useful for students' self-evaluation and goal-setting in extracurricular activities.

研究分野：社会学

キーワード：ルーブリック 学習成果可視化 自己評価 正課外活動

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の大学においては、2008年度の「学士課程答申」以降、学習成果可視化が不可欠のものであると認識されるようになった。各大学は様々な工夫を凝らし、学生がディプロマポリシー(DP)をどこまで達成したか、さらには汎用的能力をどの程度身に付けたか、といった観点から学習成果可視化の仕組みを導入しつつある。

学習成果可視化の目的は、学生と大学のそれぞれにおける、改善とアカウンタビリティにある。すなわち、学習成果可視化の目的は以下のように整理できる。

学生：

改善 学生が、具体的な目標に向けて学習の動機を高め、学習の改善を自律的に行なうことに資する。

アカウンタビリティ 学生が、自身の知識・スキル・態度を適切に把握し、それらを社会に対して説得力のある形で説明することに資する。

大学：

改善 大学が、組織的に不断の教育改善を行なっていくことに資する。

アカウンタビリティ 大学が、DP等の目標を達成した学生を育成できていることを、社会に対して説得力のある形で説明することに資する。

これまでの学習成果可視化の取組みの多くは、大学教育の改善と大学のアカウンタビリティに資することを重視し、言わば機関としての「大学」の視点に立った教育成果の可視化に力点を置いてきたと言える。大学教育再生加速プログラム採択校をはじめとして、いくつもの大学で様々な量的調査が行なわれるとともに、DP等の達成度を可視化するシステムが開発されてきたことにより、これらの取組みは着実に成果を上げていると言えるだろう。

しかし、「学生」の視点に立った際の、学生自身の学習改善とアカウンタビリティが確実に実現されているかということについては、十分な調査が行なわれているとは言い難い。

そこで、本研究では、学習成果可視化の研究と取組みが進展する現状において、学生の学習改善やアカウンタビリティの実態を適切に把握することを可能とするために、上記の問題に取り組むこととした。したがって、本研究の学術的問いは以下のように設定された。

- 学生自身による自己評価はどのように行われるべきか。
- 学生自身の学習改善と学習状況に関する説明はどのように行われているか。

以上が本研究開始当初の背景であり、ここから本研究の目的が導き出された。

2. 研究の目的

上記の学術的問いを踏まえると、本研究の目的は以下のように設定できる。

- 学生の自己評価の実状を明らかにすることで、どのような自己評価が行われるべきか、具体的な方法を示す。
- 自己評価を踏まえた学生が、学習改善と学習状況をどのように説明できるかを明らかにすることで、学生にとって意味のある学習成果可視化のあり方を示す。

いずれの目的も、学生の視点から見た際に、学習成果可視化の取組みはどのように目に映っているのだろうかという問いを研究の根底に据えている。学習成果可視化が「1. 研究開始当初の背景」で示した目的を達成するためのものであれば、学生の実状を深く知り、学生にとって意味のある学習成果可視化を実現しなければならないはずである。

したがって、本研究は徹底して「学生の声」に耳を傾けていくこととした。

3. 研究の方法

本研究は、前項で示した目的のために、大学生の正課内外の諸活動の状況、それに対する学生自身による自己評価の実状、こうした自己評価を学生はどのように活用することを望んでいるか、実際にどのように活用しているかといった4点について、研究代表者の所属大学の学生を対象とした質的調査を行なう。具体的には、学生グループ(複数)を対象として、自己評価の実践の観察・記録やインタビュー調査を行なう。こうして得られた自己評価に関するデータについて分析を行っていく。

これらの分析結果を基にして、学生の自己評価を適切に評価する方法や、学生にとって意味のある学習成果可視化の仕組みを構築する際に重視すべき観点を明らかにする。

なお、研究の進捗により、学生の自己評価において、学生自身がルーブリックの作成に関与す

ること(教員と学生とが協働してルーブリックを作成すること)に大きなメリットがあるということがわかった。そのため、ルーブリックの作成に参与した学生に特に注目し、自己評価の実践の観察や記録、インタビュー調査を行うこととした。

4. 研究成果

本研究の成果を、「2. 研究の目的」で示した目的に沿ってまとめていく。

【学生の自己評価の実状を明らかにすることで、どのような自己評価が行われるべきか、具体的な方法を示す】

(1) 正課の授業における、教員と学生との協働によるルーブリック作成：学生発案型授業

研究代表者の所属大学では、2017年度より学生発案型授業を開講している。同授業では、学部学生のスチューデント・アシスタント(以下、SA)が授業の企画段階から実施段階に至るまで深く関与し、授業当日は、SAが事前に学びを深めたテーマを取り上げ、SAと受講生がともに学び合う点に特徴がある。2020年度以降の授業では、授業の途中において学生同士で互いに学習状況を確認する際に、より明確な観点から詳細な自己評価とフィードバックを行うことを可能とするために、SAと教員とが議論を重ねて作成したルーブリックを導入した。

学生と教員とが協働してルーブリックを作成する利点として、授業の課題に対する学生の理解が確かなものとなり、課題に取り組む動機付けも高まること、さらには、学生たちの既存の知識、自己評価能力、意欲等に関する情報を教員が知ることができるようになることなどが指摘されている(Stevens and Levi 2013)。本研究ではこのことを踏まえ、学生にもたらされる効果に着目し、実際の授業を題材として効果の詳細を明らかにすることとした。

主な結果として、学生における「授業内の学びの深化」と「授業外の学びへの波及効果」が指摘できる。具体的には、ルーブリックの作成段階においては、SAにおいて、大学での学びの中でどのような「力」を伸ばしていくべきかということについて自分自身の言葉で考えられるようになることが明らかとなった(授業外の学びへの波及効果)。

ルーブリックの活用段階においては、SAと受講生の双方において、ルーブリックの文言が指し示す内容や、修正すべき点などにまで議論が及んだ。こうした活発な議論を通じ、授業の到達目標に対する深い理解が見られ、そのことで、目標への到達度を常に自己評価し、自身の強みと弱みをもとに自己評価することが可能となり(授業内の学びの深化)、授業の枠を超えた自身の学習目標の検討が促されることが明らかとなった(授業外の学びへの波及効果)。さらに、ルーブリックの作成や修正に学生が関与することにより、「この授業は自分たちの授業である」という意識が強まった。

学生と教員とが協働してルーブリックを作成する際、学生の関与の度合いによって、学生に与える効果や適した授業形式が異なることが想定される(Stevens and Levi 2013)。ここでは、少人数で議論を活発に行う授業において、SAに対してはルーブリック作成への全面的関与を求め、受講生に対してはすでに作成したルーブリックへの意見を求める限定的な関与を求めた。

(2) 正課外活動における、教員と学生との協働によるルーブリック作成：ピアサポート活動

研究者の所属大学では、2020年度より学生同士の学生支援・学習支援の取組として、ピアサポート活動を実施している。ピアサポート活動を実施するピアサポート組織は、教員1名、事務担当者2名、ピアサポーター(学生)約20名で構成されている。ピアサポーターは、学生生活面での相談、学生間のつながり創出の手助け、学修環境の整備、能動的な学修を促す企画の実施などを行っている。特に大学院生のピアサポーターは、各自の経験や専門知識を活かし、学修面での困りごと(レポートの書き方や、数物化等の基礎的な学修方法)について、より高度な相談対応を行っている。

ピアサポート組織の取組内容は、大枠を教員が指定した後、ピアサポーターが自由な発想で提案し、教員も含めミーティングで議論を重ねて具体化し、実行に移していくこととなっている。こうしたミーティングの中で、ピアサポーター自身のサポート能力向上のために、ピアサポートにおいて求められる能力や姿勢にはどのようなものがあるかということについて教員とピアサポーターとで議論を重ねた。その議論の結果、教員とピアサポーターとで協働し、ピアサポーターとしての能力・姿勢を自己評価するためのルーブリックを作成した。本研究では、ルーブリック作成・活用の過程において学生にもたらされる効果について明らかにすることとした。

主な結果として、「活動に対する内発的動機付けの高まり」と「自身の成長に対する意欲の高まり」が指摘できる。具体的には、ルーブリックの作成段階においては、自身が属するピアサポート組織においてどのような能力や姿勢が求められるかを話し合うことで、ピアサポート組織の存在意義や特長、目標設定などについても議論が及んだ。これは、自身が属する組織のあり方を自分たちで考え、決めることができる(決めなければならない)という思いをピアサポーターに抱かせる効果があった。このことにより、正課外活動に取り組む際にルーブリックを教員と学生とが協働して作成することで、必ずしも外的な報酬によらず、「自分の組織のことを自分自身で決められる」という可能性が強い動機として機能し、活動への理解の深化や主体的な目標設定などを可能にするということが明らかとなった。

ルーブリックの活用段階においては、ピアサポート組織において活動する上で求められる能

力や姿勢が可視化され、かつ、それらの能力や姿勢はピアサポーター自身が議論に参加し考えだしたものであるという意識が働くため、それらの能力・姿勢を修得するための意欲が飛躍的に高まった。具体的には、ルーブリックに記載された能力・姿勢を身につけるために、ピアサポーター自身で勉強会を実施したり、それらの能力・姿勢の修得に焦点化したイベントを企画・実施するなど、自身が成長するための具体的な取り組みに対し、強い意欲を生み出すということが明らかとなった。

以上より、学生と教員とが協働してルーブリックを作成し、それにより自己評価を行うことを促すことで、学生は自己評価に対する意欲を高め、その後の学習に対する指針を具体的に得ることができるようになると言える。これは、正課内学習だけではなく、正課外活動においても同様のことが言える。

【自己評価を踏まえた学生が、学習改善と学習状況をどのように説明できるかを明らかにすることで、学生にとって意味のある学習成果可視化のあり方を示す】

これまで見てきたように、学生発案型授業とピアサポート活動の事例を通じ、教員と学生とが協働してルーブリックを作成することで、ルーブリックの記載内容を「自分ごと」として捉え、より積極的に記載された能力・姿勢を身につけるための努力を重ねていくようになるということが明らかとなった。

こうした努力の過程を詳細に見てみると、自分自身が考えたルーブリックだからこそ、そこに記載された能力・姿勢をなんとしてでも身につけていきたいと考え、現状の修得状況について冷静かつ客観的に自己評価し、説明できるようになったと考えられる。特に、自己評価を行う際に、自分一人で評価を行うだけではなく、他者に意見を求め、互いの能力・姿勢の到達度について議論を重ね、最終的な評価を下していくという過程が生じていった。

他者による評価も、自己による評価も、評価と名の付くものをオープンにする学生はそれほど多くないと考えられるが、教員と学生とが協働して作成したルーブリックの活用においては、自己評価のプロセスにおいて積極的に自身の自己評価をオープンにし、他者とコミュニケーションを図りながら最終的な評価を考えていくという動きを頻繁に確認できた。

これは、たとえ自己評価であったとしても、他者の視点を一度導入することでより信頼性のある自己評価となることを意味するとともに、自己評価結果を説明する際に、客観的な視点も取り入れた形で説明できるようになることも意味する。また、こうした自己評価を踏まえると、現在の学習状況の改善点も的確に説明できることとなり、今後の学習計画を具体化することに寄与すると言える。

以上より、学生と教員とが協働してルーブリックを作成することで、学生は他者の視点を取り入れた自己評価を実施し、その結果や学習状況を客観性のある形で説明できるようになると言えることから、学生の学習改善にとって効果的な学習成果可視化であると考えられる。

< 引用文献 >

Stevens D. D. and Levi A. J., 2013, *Introduction to Rubrics (2nd ed.)*, Sterling, VA: Stylus Publishing. (= 佐藤浩章監訳, 2014, 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部.)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 千葉美保子, 嶋田みのり, 多田泰紘, 石井和也	4. 巻 45
2. 論文標題 ニューノーマル時代の学習環境をデザインするには : 学習環境ハンドブックの開発と拡張版LSRSの試行報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 175-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 千葉 美保子, 石井 和也, 浦田 悠, 多田 泰紘	4. 巻 44
2. 論文標題 ニューノーマル時代における学習環境・学習支援のデザインを考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 173-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石井和也	4. 巻 2022年度No. 4
2. 論文標題 ブレンディッドラーニングの推進と多面的評価による自律的学修者の育成	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育と情報	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤木清, 松尾美香, 荒木俊博, 望月雅光, 石井和也, 川越明日香	4. 巻 43
2. 論文標題 学習者中心の教学マネジメントとIRに関する実践的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 124-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 インフォーマルな学習環境の運営に関わる大学生による拡張版LSRS(Learning Space Rating System)の試行：拡張版LSRSを学生スタッフの研修に取り入れることは可能か
3. 学会等名 大学教育学会第45回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 ニューノーマル時代における学習環境・学習支援のデザインに関するインタビュー調査の概要と論点整理
3. 学会等名 大学教育学会第44回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 大学生における「居場所」の生成と消滅に関する考察
3. 学会等名 大学教育学会第44回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 学習者中心の教学マネジメントとIRに関する実践的研究：授業運営への学生参加の取組（ラウンドテーブル10）
3. 学会等名 大学教育学会第43回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 大学生における「居場所」の特徴に関する考察：「異質な者」との交流に着目して
3. 学会等名 大学教育学会第43回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 大学生にとっての「居場所」が意味するものは何か
3. 学会等名 日本高等教育学会研究交流集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川面きよ, 千葉美保子, 石井和也
2. 発表標題 コロナ禍におけるラーニングコモンズに関する議論の変化
3. 学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 学生と教員との協働によるルーブリック作成の試み：学生発案型授業を事例として
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 学生が学生に「教える」際の演技に関する一考察：学生発案型授業のスチューデント・アシスタントを事例として
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 学生は授業外での学びが学生自身に何をもたらすと考えているか：学生による自己評価を通じた考察
3. 学会等名 日本高等教育学会第23回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 教学マネジメントにおける学修成果の可視化について
3. 学会等名 令和2年度秋田県立大学全学FD講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井和也
2. 発表標題 コロナ禍におけるピアサポート：宇都宮大学の取組事例
3. 学会等名 日本学生支援機構 令和2年度学生生活にかかる喫緊の課題に関するセミナー
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------